

# JSTの国際青少年交流

国際青少年サイエンス交流事業

さくらサイエンスプログラム

インド若手科学頭脳循環プログラム

LOTUS Programme

日ASEAN 科学技術・イノベーション協働連携事業 (NEXUS)

若手人材交流プログラム (Y-tec)



# さくらサイエンスプログラム

新たな時代の社会を担う世界の優れた人材を日本へ

## さくらサイエンスプログラムの目的

研究開発を促進しその成果をイノベーションにつなげることは、将来に向けた世界共通の課題です。科学技術振興機構(JST)は2014年に「さくらサイエンスプログラム」を開始し、海外の優秀な若者を日本へ短期間招き、日本の先端的な科学技術や文化に触れていただく事業を進めています。

2024年までに約43,000人の招へいが実現しました。

さくらサイエンスプログラムは産学官の緊密な連携により、日本の青少年と海外の国・地域の青少年との科学技術分野の交流を通して、

- ・ 科学技術イノベーションに貢献しうる優秀な人材の養成・確保
- ・ 国際的頭脳循環の促進
- ・ 日本と諸外国・地域の教育研究機関間の継続的連携・協力・交流
- ・ 科学技術外交にも資する日本と諸外国・地域との友好関係の強化

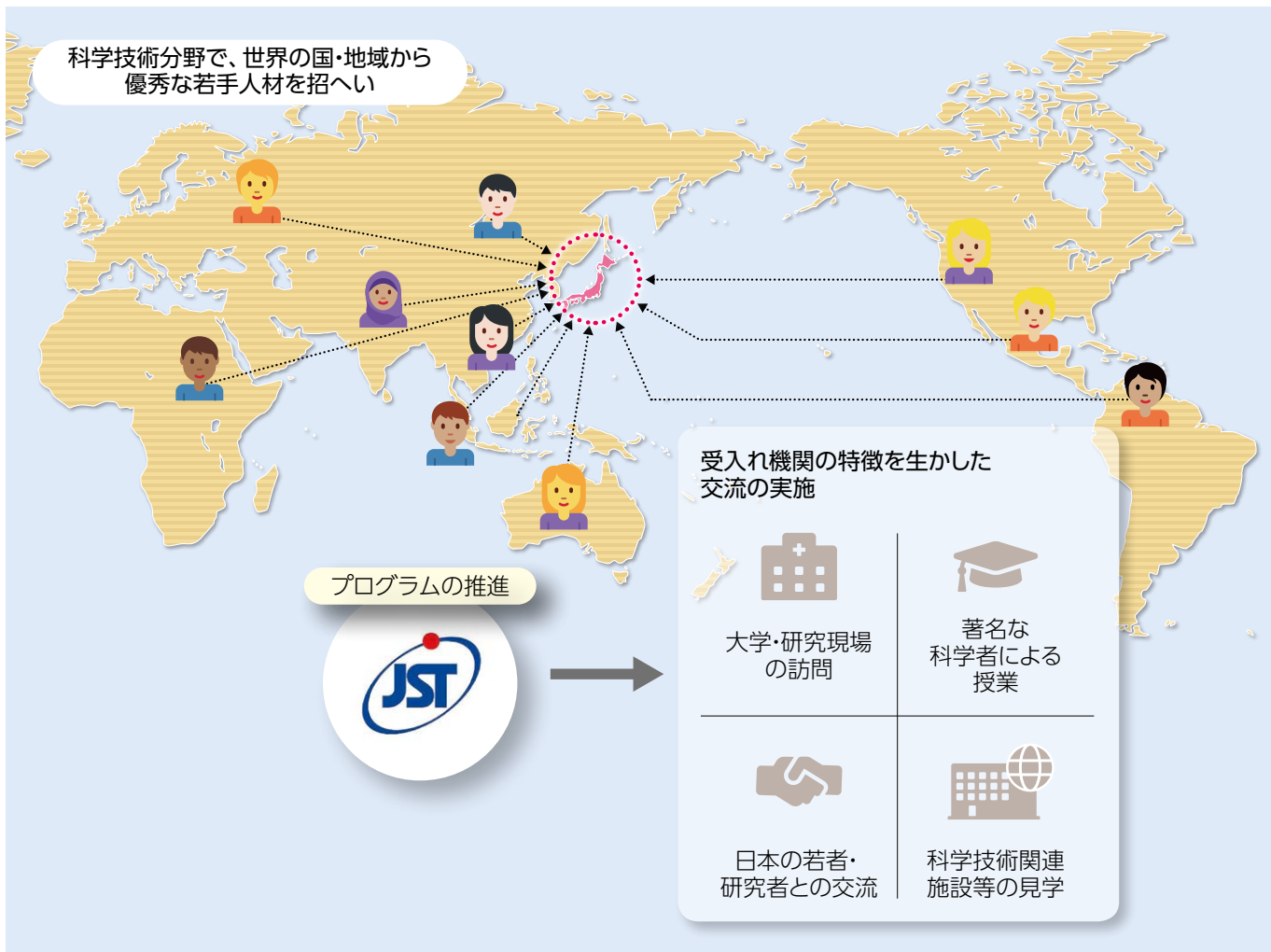
に貢献し、ひいては、日本及び世界の科学技術・イノベーションの発展に寄与することを目的とします

## さくらサイエンスプログラムの招へいについて

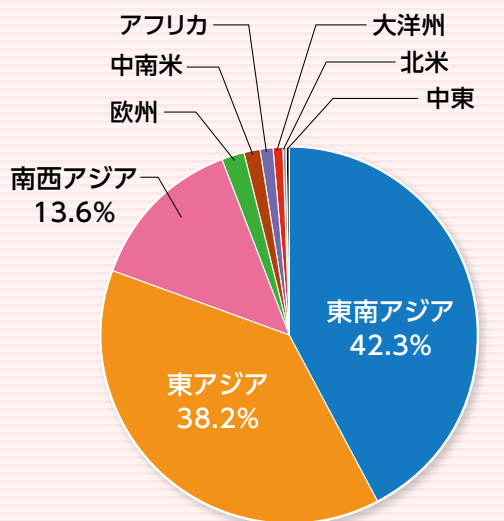
- ▶ **招へい対象国・地域**：原則として全ての国・地域
- ▶ **招へい対象者**：40歳以下の学生、研究者、科学技術にかかわる業務に従事する方々
- ▶ **対象分野**：人文科学及び社会科学分野を含む科学技術分野における交流
- ▶ **受入れ機関**：日本全国の教育・研究機関、企業、地方公共団体、各種団体など
- ▶ **経費**：JSTが必要経費\*（渡航費・滞在費など）を支援

\* 企業が受入れ機関となる場合は、渡航費のみ

科学技術分野で、世界の国・地域から  
優秀な若手人材を招へい

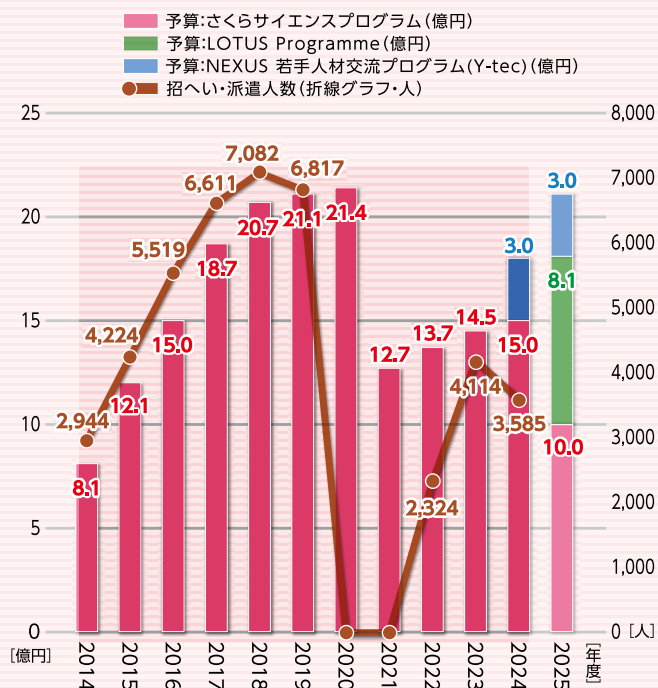


### さくらサイエンスプログラム 招へい者の地域別内訳



■ 2014年度～2024年度：計42,652人  
■ 世界90カ国・地域から招へい

### JSTの国際青少年交流の予算及び人数



\*NEXUS(日ASEAN科学技術・イノベーション協働連携事業)

\*新型コロナウイルス感染症の拡大により、2019年度は招へい人数が減少。2020年度～2021年度は招へい実績なし。

# さくらサイエンスプログラムの内容

## 一般公募招へい

日本の受入れ機関と海外の送出し機関が作成した交流計画を広く公募し、採択します。2024年度までに**3,692件**の交流プログラムが実施され、**34,661人**の招へいが実現しました。  
(\*海外計2,002機関が若者を派遣し、日本国内402機関が受け入れて交流の広がりを支えています)

### 一般公募招へいの種類

コース名	交流期間	対象国・地域	対象者	公募
<b>A</b> <b>科学技術 体験コース</b> 日本の先端の 科学技術に触れる体験	原則 7日間まで	〈2025年度〉 アジア、アフリカ、 中東、中南米、島 しょ国等 (148カ国・地域)	40歳以下の高校 生、高等専門学校 生、大学生、大学 院生、ポストドク ター、教員など (初来日者)	年数回
<b>B</b> <b>共同研究 活動コース</b> 共同研究テーマや 予備の実験の実施など	21日間まで			
<b>C</b> <b>科学技術 研修コース</b> 日本の先端の技術や 能力の習得	10日間まで			
<b>D</b> <b>相補的 年間交流コース</b> インド・アフリカの青少 年と日本の青少年の相 互交流(派遣・招へい)	通年* 派遣・招へいは各 最長3カ月/人、オ ンラインと組み合 わせた最長1年間 の交流を想定 ※採択から年度末まで	インド・ アフリカ諸国	40歳以下の高等 専門学校生、大学 生、大学院生、ポ ストドクター、教 員など ※来日経験不問	年1回

HP 1 [https://ssp.jst.go.jp/media/files/pdf/program/2025/youkou\\_2025.pdf](https://ssp.jst.go.jp/media/files/pdf/program/2025/youkou_2025.pdf)

HP 2 [https://ssp.jst.go.jp/program/application\\_shohei/](https://ssp.jst.go.jp/program/application_shohei/)

HP 3 [https://ssp.jst.go.jp/program/application\\_souho/](https://ssp.jst.go.jp/program/application_souho/)

### 実施までのプロセス

日本と海外の機関が  
共同で交流計画を作成し、  
JSTに申請

選考委員会を経て  
JSTが採択。  
JSTによる経費支援

**プログラムスタート!**



# 直接招へい

JSTが受入れ機関となり特色ある招へいプログラムを企画・実施します。  
2024年度までに**7,991人**を招へいしました。

## ハイスクールプログラム

海外の優秀な高校生に、日本の最先端の科学技術に触れる機会を提供します。

- ▶ ノーベル賞受賞者などによる特別授業への参加
- ▶ 著名な日本の大学・研究機関の訪問
- ▶ 日本の高校生との交流
- ▶ 日本留学制度説明会への参加

● 活動レポートHP



<https://ssp.jst.go.jp/report/2024/#section2>



ノーベル賞受賞の天野浩先生の講演。愛知県立岡崎高等学校にて(2024年6月)



名古屋大学にて低温プラズマ科学を学ぶ(2024年6月)



日本学生支援機構(JASSO)による日本留学制度説明会(2024年12月)



日本の高校生と共にドローンプログラミングに挑戦。茨城県立土浦第一高等学校にて(2024年10月)

## 科学技術関係者招へいプログラム

海外の科学技術関係者を日本に招へいし、日本の科学技術行政、教育行政などについて理解を深め、両国の交流の架け橋となっていただくことを目的に実施します。海外と日本の大学関係者による大学交流会も実施します。



アフリカ科学技術者招へいプログラム。  
東京工業大学\*にて(2023年5月)  
※現・東京科学大学

■ 2023年度・2024年度にはインド大学生招へいプログラムを実施しました。● 活動レポートHP



<https://ssp.jst.go.jp/report/2024/>

## 一般公募招へいの活動事例



### A コース

インドの大学生が最先端の化学実験を体験(富山高等専門学校 2024年9月)



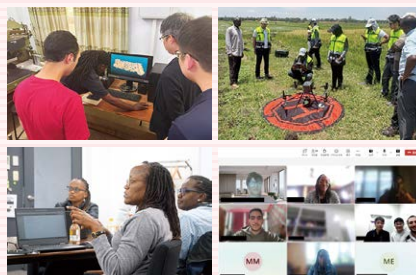
### B コース

マレーシアの大学院生がゲノム情報時代の生物多様性資源管理を学び、共同研究の礎を築く(国立遺伝学研究所 2024年9月)



### C コース

日本の医工技術の研修を通じて、インドの医療課題解決に向けた新たな視点を育む(電気通信大学 2024年9月)



### D コース

農作物の監視技術とその基盤技術の確立に向けた日・ケニア・エジプト共同プロジェクト(九州大学 2025年1月～3月)

## 二国・多国間交流

頭脳循環に資する質の高い交流への発展を目指して、インド、アフリカ、アジアと日本の機関間交流を戦略的に実施しています。

### インド

### 日印トップ大学の学長等による「日印大学等フォーラム」

科学技術分野における日本とインドの協力を一層促進するための交流基盤の形成を目的として、「日印大学等フォーラム」を開催しています。

回	開催日・場所	テーマ	参加
第一回	2023年1月23日 東京	「日印間の大学・研究機関間交流の強化と今後の課題解決」 —若手イノベーション人材の育成と交流—	インド側9大学、日本側21大学・研究機関、1関係機関
第二回	2023年9月30日 京都	日印間の頭脳循環の促進を目指して	インド側10大学、日本側21大学・研究機関、2関係機関、3企業
第三回	2024年10月19日 インド・ニューデリー	日印頭脳循環の促進とその人材の活用	インド側33大学、日本側28大学・研究機関、6関係機関、5企業
第四回	2025年11月15日 インド工科大学(IIT)ハイデラバード校にて開催(予定)		



第二回日印大学等フォーラム(左:シビ・ジョージ駐日インド大使挨拶、中:基調講演、右:歓談の様子)

「第三回」では、日印頭脳循環に関する各種取り組みの状況や先進事例の共有を通し、今後交流を拡大するために解決すべき課題について検討を行いました。インドに進出あるいは、インドからの人材の雇用に意欲のある企業

も参加して、日印間の産学官連携の促進についても踏み込んだ議論が行われたほか、日印の各機関が具体的な協力関係の構築に向けて個別に意見交換も実施しました。



第三回日印大学等フォーラム(左:集合写真、右:円卓会議)



## アフリカ 日本・アフリカ大学交流会議

日本とアフリカ諸国の大学間連携を促進し、人材交流を活性化することを目的として「日本・アフリカ大学交流会議」を開催しています。意見交換等を通じて、各機関の特徴や強み、日本、アフリカ間の国際交流の現状や将来への期待・展望について共有します。

開催名	開催日・場所	参加
日本・アフリカ大学交流会議 第8回アフリカ開発会議 (TICAD8) 公式サイドイベント	2022年8月22日 オンライン	南アフリカ、チュニジアなどのアフリカ36カ国・地域を含む44カ国・地域 263名
日本・アフリカ大学交流会議2023	2023年5月31日 東京	アフリカ側(エジプト、ガーナ、ケニア、ナイジェリア、南アフリカ、ザンビア)9大学、日本側18大学・2機関
ウェビナー 2024: Sharing case studies of building strong and productive collaboration between Japan and African countries	2024年7月23日 オンライン	アフリカ10カ国・地域を含む21カ国・地域 190名
日本・アフリカ大学交流会議2025 第9回アフリカ開発会議 (TICAD9) パートナー事業	2025年8月19日 東京(予定)	アフリカ側参加予定(エジプト、チュニジア、ガーナ、ナイジェリア、エチオピア、ケニア、ルワンダ、ザンビア、ボツワナ、南アフリカ)



日本・アフリカ大学交流会議2023(左:集合写真、右:歓談の様子)

## アジア アジア大学フォーラム

「アジア大学フォーラム」は2010年から2022年まで16回にわたり開催された「日中大学フェア&フォーラム」を拡大発展させたものです。日本、中国及び他のアジア地域から科学技術を先導する大学等が一堂に会し、各大学の多様で先進的な取り組み事例などを共有します。アジア地域全体の学術的な連携を強化し、国際的な頭脳循環の発展を目指します。

回	開催日・場所	テーマ	参加
第一回	2024年1月27日 中国・香港	アジアにおける人材育成・確保及びイノベーションと発展の促進	アジアの有力大学の学長等27名(日本10名、中国9名、ASEAN諸国8名)
第二回	2025年2月17日 東京	アジアにおける頭脳循環及びイノベーションの促進	アジアの有力大学の学長等30名(日本11名、中国10名、ASEAN諸国9名)
第三回	2026年1月 中国にて開催(予定)		



第二回アジア大学フォーラム(左:基調講演、中:円卓会議、右:集合写真)

# さくらサイエンスプログラムのこれまでの成果

日本への  
理解度・好感度が  
向上

招へい者の**99%**が「来日前よりも日本が  
好きになった」と回答(アンケート結果)

イノベーション  
人材の  
再来日を促進

これまでに約**3,000人**の優秀な青少年が  
留学生、研究者などで再来日

受入れ機関の  
グローバル化に  
貢献

「組織の国際化が促進された」「組織の国  
際的PRにつながった」「世界大学ランキング  
のスコアアップにつながった」と受入れ機関ア  
ンケートに回答

MOU(学術交流協定等の合意文書)締結



日本科学未来館にて(2025年2月 武蔵野大学)



SDGs達成を目指すワークショップ(2025年2月 千葉大学)

## 科学技術外交・政策における効果

▶ ハイレベルの外交場面で、中国・習近平国家主席、インド・モディ首相、スリランカ・ウィクラマシンハ前首相など、各国要人から高い評価と支持を獲得しています。

▶ 2023年3月、日印首脳会談で、さくらサイエンスプログラムでの青少年招へいにより、教員や学生間の交流が促進されることへの期待が表明されました。

▶ 2024年10月、第27回日・ASEAN首脳会議の議長声明の中で、さくらサイエンスプログラムを通じた人的交流、科学技術交流、研究協力を促進する継続的な努力について言及されました。



日・ASEAN首脳会議(2024年10月ラオス・ビエンチャンにて)

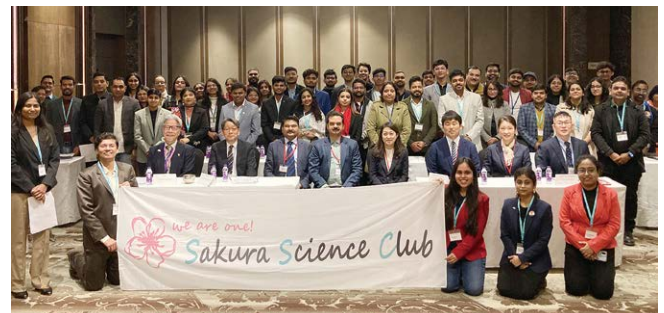
出典:首相官邸ホームページ([https://www.kantei.go.jp/jp/102\\_ishiba/actions/202410/10asean\\_1.html](https://www.kantei.go.jp/jp/102_ishiba/actions/202410/10asean_1.html))を加工して作成



日印首脳会談(2023年3月  
インド・デリーにて)  
写真提供:内閣広報室

## ネットワーク構築 「さくらサイエンスクラブ」

「さくらサイエンスクラブ」では、クラブメンバーが継続的に日本と母国の架け橋となり、活躍していただくために役立つ情報をウェブサイトで提供し、各地で同窓会を実施しています。また、メンバー同士もSNSでつながって、自由に交流しています。クラブの会員数は約43,000人となり、大きなネットワークになっています。



第6回インド同窓会(2025年1月インド・ニューデリーにて)

● さくらサイエンスクラブ HP  
<https://ssp.jst.go.jp/sns/top.html>





### ジンダル・ナット・ヴィプールさん(インド出身)

**現所属** ネクストパーラトベンチャーズIFSC\*社長  
(Next Bharat Ventures IFSC Private Limited)  
\*スズキインド子会社

さくらサイエンスプログラム(SSP)は私の人生の重要な節目でした。もし、SSPがなかったら、おそらく日本を訪れることも、日本で働くこともなかったでしょう。SSPによって、世界中の学生たちが日本とつながったり、日本で学んだりするだけでなく、将来、さまざまな国や地域と日本の個人や企業とのコラボレーションが生まれることを期待しています。



### エクサティ・アンサヤさん(タイ出身)

**現所属** 物質・材料研究機構(NIMS)電子・光機能材料研究センター  
光学材料分野 多結晶光学材料グループ ポスドク研究員

さくらサイエンスプログラム(SSP)によって、今までに聞いたこともないような興味深い研究活動に触れ、私の科学研究に対する視野を広げ、知識を深めてくれました。SSPなしでは、日本でのキャリアを開始することはなかったでしょう。SSPが日本での活動に関心のある海外の学生を今後もサポートし続けることを願っています。



### フェン・イホンさん(中国出身)

**現所属** 大学共同利用機関法人 自然科学研究機構 基礎生物学研究所(NIBB)  
細胞動態研究部門 ポスドク研究員

さくらサイエンスプログラム(SSP)に参加する前は、海外で博士号を取得するとは想像していませんでした。SSPは日本で挑戦してみたいという思いを与えてくれました。自分自身の成長を感じることができてとても嬉しいです。海外の学生と日本の学生との間で、SSPを通じた交流の機会がより増えていくことを楽しみにしています。



## さくらサイエンスプログラムの支援の輪が広がっています (さくらサイエンスプログラムサポーター)

(敬称略)

江崎 玲於奈	1973年	ノーベル物理学賞受賞	中村 修二	2014年	ノーベル物理学賞受賞
利根川 進	1987年	ノーベル生理学・医学賞受賞	大村 智	2015年	ノーベル生理学・医学賞受賞
白川 英樹	2000年	ノーベル化学賞受賞	梶田 隆章	2015年	ノーベル物理学賞受賞
野依 良治	2001年	ノーベル化学賞受賞	大隅 良典	2016年	ノーベル生理学・医学賞受賞
田中 耕一	2002年	ノーベル化学賞受賞	本庶 佑	2018年	ノーベル生理学・医学賞受賞
小林 誠	2008年	ノーベル物理学賞受賞	眞鍋 淑郎	2021年	ノーベル物理学賞受賞
鈴木 章	2010年	ノーベル化学賞受賞	筒井 義信	日本経済団体連合会(経団連)会長	
山中 伸弥	2012年	ノーベル生理学・医学賞受賞	黒田 玲子	中部大学卓越教授、 元国際科学会議(ICSU)副会長	
天野 浩	2014年	ノーベル物理学賞受賞	毛利 衛	日本科学未来館名誉館長、宇宙飛行士	

2025年度  
新設

# インド若手科学頭脳循環プログラム LOTUS Programme



## インドの大学院生・ポスドクターが、 日本で活躍するための研究滞在を支援します

近年、研究力が急激に成長し、優秀な若手人材の宝庫であるインドとの、理工系分野の連携強化の必要性は急速に高まっています。また、世界各国によるインドの理工系人材の獲得競争が激化する一方で、日印間の人材交流・協力は十分とは言えない状況にあり、インドとの研究交流の強化が求められています。

インド若手科学頭脳循環プログラム(LOTUS Programme: India-Japan Circulation of Talented Youths in Science Programme\*)は、日本とインドの大学・研究機関による共同研究を通じて、インドの優秀な若手研究人材を招へいして日本とインドの教員が共同で指導を行い、さらに自身の日本でのキャリア形成を目指すプログラムです。また、これら共同研究やグローバルな「知」の交流促進、国際頭脳循環人材の育成等を通じて、我が国の研究力、イノベーション力の強化を目指します。

対象者	インドの大学に所属する修士・博士課程学生、ポスドクター
招へい期間	最長1年
対象分野	①AI・情報 ②バイオ ③エネルギー ④マテリアル ⑤量子 ⑥半導体 ⑦通信 等
公募	年1回程度

### 実施までのプロセス

日本とインドの機関が  
共同で交流計画を作成し、  
日本側機関がJSTに申請

選考委員会を経て  
JSTが採択。  
JSTによる経費支援

プログラムスタート!



試料作製のための粉末粉碎装置及び粒度分布測定装置を使って実験をするIITマドラス校のポスドク(2025年3月 長岡技術科学大学)



SuperKEKB加速器で素粒子物理学実験を行うIITハイデラバード校の大学院生(2025年4月 高エネルギー加速器研究機構)

● LOTUS Programme HP

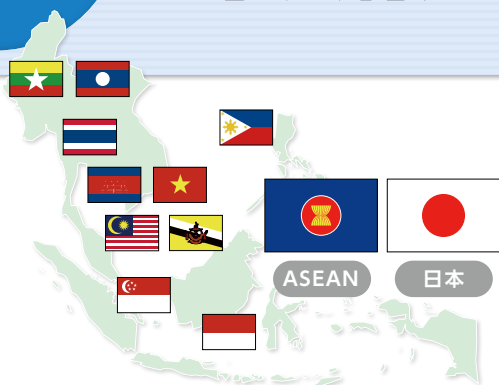


※LOTUS(ハス)はインドの国花です。

<https://www.jst.go.jp/program/india/>

ASEANを  
対象とした  
発展プログラム

# 日ASEAN 科学技術・イノベーション協働連携事業 (NEXUS) 若手人材交流プログラム (Y-tec)



「さくらサイエンスプログラム」で培った  
交流基盤を活用し、

**我が国とASEAN諸国との  
相補的で持続可能な  
研究エコシステムを構築**

日ASEAN科学技術・イノベーション協働連携事業(NEXUS)では、2024年の「日ASEAN  
友好協力50周年」を機に、これまで我が国とASEAN諸国との間で実施してきた国際共  
同研究や人材交流等の取り組みを基盤とし、双方の強みを生かした柔軟で重層的な  
科学技術協力を推進します。これにより、相互の持続可能な研究協力関係をさらに強  
化し、イノベーションを共創するパートナーとしての成長を目指します。具体的には、  
以下3つの取り組みを進めます。

## ▶研究人材交流・育成

若手研究人材の交流支援を通じた国際的な人材育成を推進し、国際  
共同研究の萌芽形成や科学技術人材プールの形成を促進します。

## ▶国際共同研究

共通重点分野における国際共同研究を支援します。

## ▶拠点

科学技術協力を資する拠点を形成し、既存の研究拠点の活用・機能  
強化を促進します。

この取り組みの1つである**若手人材交流プログラム(Y-tec)**では、科学技術分野における  
ASEAN(東南アジア諸国連合)諸国と日本の青少年の派遣・招へいによる相互交流を支援し、共創  
するパートナーとして共に成長し、持続可能な研究協力関係をさらに強化することを支援します。

	若手人材交流コース	指導人材交流コース
対象者	高校生を含む 40歳以下の青少年	教職員、研究者など
交流期間	最長1年 派遣・招へいは各最長3カ月/人、オンラインと組み合わせたハイブリッドの交流を想定	
公募	年1回程度	



循環型蓄熱エネルギー  
材料創出に向けた研究  
協力について議論する  
マレーシア国民大学の  
若手研究者(2025年5  
月 理化学研究所)



直流電流遮断器を用  
いた実験について、研  
究室所属の大学院生  
から説明を受けるラオ  
ス国立大学の大学生  
(2025年5月 東京科  
学大学)

● 若手人材交流プログラム HP



<https://www.jst.go.jp/aspire/nexus/y-tec>



国立研究開発法人 科学技術振興機構  
経営企画部 さくらサイエンスプログラム推進本部  
〒102-8666 東京都千代田区四番町5-3 サイエンスプラザ  
Tel : 03-5214-8288  
Email : [ssp.press@jst.go.jp](mailto:ssp.press@jst.go.jp)



さくらサイエンスプログラム HP  
<https://ssp.jst.go.jp/>



LOTUS Programme HP  
<https://www.jst.go.jp/program/india/>



NEXUS 若手人材交流プログラム(Y-tec) HP  
<https://www.jst.go.jp/aspire/nexus/y-tec>